

大統領と戦った女 —メディアの女王 キャサリン・グラハム—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

大統領を辞任に追い込んだ女としてキャサリン・グラハム（1917-2001）の勇名は政治史に刻み込まれた。彼女が経営するワシントン・ポストはニクソン政権による違法な盗聴行為を発端としたウォーターゲート事件を追求し、権力に屈しない報道姿勢で全世界に知れわたった。

1998年に回想録『キャサリン・グラハム わが人生』でピューリッツァー賞を受賞し、アメリカでもっとも影響力のあるメディアの女王と讃えられた。しかし彼女はみずから望んでトップの座に就いたわけではない。自殺した夫に代わって主婦から社主へ転身し、経営難に陥っていたマイナーな地方紙を国際的なメジャー紙へと飛躍させた。

ドラマティックな彼女の生涯から予期せぬ運命に遭遇してもいつか道は拓けるといひたむきな熱意が伝わってくる。

ワシントン・ポスト再生へ

キャサリンはニューヨーク州マウントキスコでユージンとアグネスのメイヤー夫妻の三女として生まれた。父のユージンはウォール街の投資家として巨万の富を築き、世界銀行の初代総裁や連邦準備理事会（FRB）の議長を務めた。

航空写真でしか写らない40室もある大邸宅に住み、汽車で家族旅行をするときは全車両を貸し切るといふ誰もが羨む豪勢な家庭で育った。だが母のアグネスは芸術好きで社交的で子育てに関心

がなく、母への依存心が強いキャサリンは孤独な少女時代を過ごしたという。

1933年、ユージンは破産して競売にかけられたワシントン・ポストを82万5000ドルで買収し、念願の新聞経営に乗り出した。キャサリンは名門ヴァッサー女子大学に入学し、夏休みはポスト紙でアルバイトに励んだ。新聞への興味が高まってシカゴ大学へ進み、卒業後にタブロイドの夕刊紙サンフランシスコ・ニュースの見習い記者となる。

1939年、ワシントンに戻ってポスト紙の読者投書欄を週給25ドルで担当。翌年、ハーバード・ロースクールで学んだ有能な弁護士フィリップ・グラハムと結婚し、家庭に入って三男一女の母となった。

ユージンからワシントン・ポストを譲り受けたフィリップは1961年にニューズウィークを買収するなど辣腕を発揮する。ところが前途洋々の日々にも思わぬ落とし穴が待ちかまえていた。精神を病んだフィリップは暴君となり、公衆の面前で妻を罵倒したり、不倫して離婚騒動を引き起こす。最期は猟銃自殺という悲劇的な結末を迎えた。

傾きかけたワシントン・ポストの運命は経営の



キャサリン・グラハム

素人で「どの分野にも才能がなく劣等感を抱いていた」という46歳のキャサリンに託された。

社命を賭けた世紀のスcoop

1963年、まだ女性の社会進出がきわめて限られていた時代にポスト紙を引き継いだキャサリンは手探りで経営再建の道を模索した。同社の大株主である世界的投資家のウォーレン・バフェットは「彼女のデスクの上に、左側が資産、右側が負債と書いた紙が貼ってあるのを見たことがある」と述懐している。

新たな読者を獲得するためにクォリティの高い紙面づくりを決断し、ニューズウィークのワシントン支局長を務めていたベン・ブラッドリーを編集局長に迎え入れた。ベン是他紙から優秀な記者を引き抜き、精鋭部隊による自由な取材活動に経営側のキャサリンが干渉せず金銭的にも精神的にも支え抜くという理想的な編集体制が整った。

新生ポスト紙の真価は1972年、いわゆるウォーターゲート事件をめぐる世紀のスcoopで証明される。ニクソン再選を焦点に大統領選挙が白熱する中、ワシントン・ポトマック河畔のウォーターゲートホテルにある民主党選対本部に盗聴器を仕掛け、文書を盗み出そうとした一味が捕まった。犯人は共和党再選委員会の警備主任ら5人であることが判明し、ポスト紙の記者カール・バーンスタインとボブ・ウッドワードはホワイトハウスの関与を明らかにする記事を書きつづけた。

掲載にあたってニクソン政権の妨害が予想された。ポスト紙は前年、ニューヨーク・タイムズと共にベトナム戦争に関する国防総省機密文書（ペンタゴン・ペーパーズ）を暴露してニクソンと対立を深めていた。緊迫した会議の席で「やるべきだ」「いや危険だ」という意見が交錯する中、キャサリンの「やりましょう」というひとことで社命を賭けた報道に火が付いた。

政府の恫喝はポスト紙が所有するテレビ局の免許取り消しなど執拗を極めた。いかなる圧力も通じないことに業を煮やした高官がキャサリンを逮捕しろとヒステリックに叫ぶと「それじゃあ、リンカーンで刑務所に乗りつけてやるわ」と切り

返した。

追い詰められたニクソンは1974年、盗聴活動に直接かかわっていたことを示すテープが明るみに出て辞任に追い込まれる。ポスト紙の活躍は1976年「大統領の陰謀」というタイトルで映画化され、アカデミー賞4部門を受賞した。

政治を超えた友情を

権力者に恐れられたメディアの女王もふだんは驚くほど内気で穏やかで気くばりのある女性だった。ポスト紙コラムニストのリチャード・コーエンはある夏の日のエピソードを紹介している。

本社の駐車場で裏方の社員、広告担当者、新聞配達人、ビルの清掃員などをねぎらうパーティが開かれた。そこで会場へ向かうキャサリンを見つける。すでに彼女はかなりの高齢で思うように歩けなくなっていた。それでも照りつける陽射しのなかを一歩ずつゆっくりと斜面を進んでいく。「ほかの会社なら部長クラスの間が愛想を振りまいて終わるようなパーティに顔を出している。信じられないことだった」と。

社業から退いて84歳を迎えていたキャサリンは講演で訪れたアイダホ州で転倒して頭部を負傷し、意識不明のまま帰らぬ人となった。葬儀にはクリントン元大統領やマイクロソフトの創業者のビル・ゲイツなどが参列し、世界的チェリストのヨーヨー・マが彼女の死を悼んで演奏した。

セレモニーで最初に弔辞を捧げたのは意外なことにニクソン政権を中枢で支えたキッシンジャー元大統領補佐官だった。世間的には仇敵の間柄でキッシンジャー自身もポスト紙の容赦なき報道で少なからぬ打撃を受けていた。とはいえ政治と友情は別物で一緒に映画を観に行くような親しい関係だったという。

キッシンジャーはCNNのインタビューに応えてこう語っている。

「ポスト紙と私の意見が対立しがちだったことを思えば実に不思議な友人関係でした。けれど彼女は絶対に自分の新聞のために友情を利用しようとはしませんでした。特別取材などを申し込まれたことは一度たりともなかったのです」。